

## 「刎頸の友、郭沫若と成仿吾のふれ合いについて」(下)

### 【サマリー】

齊藤 孝治

中国で考古学を美術史の観点からとらえたのは 1920 年代後半、郭沫若が世に出した「美術考古發現史」が端緒とされています。

この「美術考古發現史」には原書がありました。ドイツの有名な考古学者 A・ミハイリスが 1905 年、ライプツヒにあったベーゼン書店から出版した「第 19 世紀に於ける考古学的発見」です。

郭沫若は、すでに東京の岩波書店から出版されていた当時、京大助教授だった濱田耕作が日本語に翻訳した「ミハイリス氏 美術考古學發見史」を中国語に訳し、初版本として出版したのです。

しかし濱田の日本語訳は直訳や誤訳がかなり見受けられました。

郭沫若は、それを利用したのですから「美術考古發現史」の初版本は濱田の“過ち、をそのまま引き継ぐ結果になってしまったのです。

この“過ち、については、一部の学者から指摘されるばかりか、郭沫若自身も気づきました。

自負心の強い郭沫若が放っておくことは出来ませんでした。

郭沫若はその頃、ベルリンにいた親友の成仿吾に原書の入手を依頼したのです。

友の困窮に成仿吾は、直ちに原書を購入して市川の郭沫若の元に送付したのです。

こうして初版の“過ち、は解消され、郭沫若は胸を撫でおろすことが出来ました。

本文は、二人の友情を示す証しの一例として紹介したものです。